

廬山寺蔵『選択集』の研究

春本龍彬

本稿は今より八〇〇年以上前、鎌倉時代の初めに浄土宗の開祖である法然が撰述した『選択集』を取り上げ、とりわけ京都市上京区の寺院、廬山寺が所蔵する『選択集』（「廬山寺本」）に着目し、『選択集』の新たな側面について論じたものである。

『選択集』には、一般的に『選択集』諸本と通称されるように、當麻寺奥院が所蔵する『選択集』（「往生院本」）、鹿ヶ谷法然院が所蔵する『選択集』（「延応版」）、江戸時代初期から中期にかけて活躍した学僧義山が開版した『選択集』（「義山版」）など固有の特徴を有する様々な種類の本が存在しているが、中でも「廬山寺本」は、筆録された本文の間をはじめとしたあらゆる場所に推敲跡と見られる書き入れが数多く遺っている状況から、撰述時の草稿本にして、現存最古の写本と評価されている国指定の重要文化財（旧国宝）である。

したがって、「廬山寺本」に焦点をあてて『選択集』を理解していく姿勢が史実把握の上では必要不可欠であると考えられ、実際にこれまでにも『選択集』撰述の真相を詳らかにするべく、「廬山寺本」に関する研究が数多く行われてきた。

しかし、「廬山寺本」の様子が複雑であったためなのか、「廬山寺本」の研究は未だ発展途上にあり、書誌の評価、推敲跡の議論、他本との比較考証等々が充分に行われていない。

そこで、本稿では筆者自身による「廬山寺本」の実地調査や津島市西光寺の地藏菩薩像体内から発見された新出資料である『無量義経』以下諸々の文献にしたがって「廬山寺本」の書誌を変化に留意しつつ今一度整理した上で、次に分析の余地がある「廬山寺本」の推敲跡を対象として多角的に考察し、更にそれと関連させて「廬山寺本」と他本を新たに系統論の視点から思索する方法で「廬山寺本」の研究を体系的に発達させ、『選択集』の展開過程、すなわち『選択集』がどのような経過をたどってできあがり、広まっていったか明らかにすることを目的とした。

本論は三章で構成した。

第一章では「廬山寺本」が如何にして形作られ、現在に至るまでどのように変遷してきたか詳らかにした。第一節では筆者が行った実地調査の結果に基づいて「廬山寺本」の現状を確認した。第二節では「廬山寺本」の状態から逆算し、「廬山寺本」の原装が折紙綴葉装であったと論じた。第三節では先行研究の成果を考慮しつつ、津島市西光寺所蔵の『無量義経』を引き合いに出して「廬山寺本」の筆跡を見直すと同時に「廬山寺本」と他の資料との兼ね合いを検討することで「廬山寺本」撰述時の筆録者は法然、遵西、感西、証空の四名であり、且つ筆録にあたっては和文体の手控えを漢文体へ直す、口述筆記をする、原典の引用をするなどの方法が用いられたと明らかにした。第四節では「廬山寺本」に遺されている書き入れを分析し、「廬山寺本」には撰述時から後世まで五月雨式に書き入れが施されていたと考察した。第五節では多様な文献に登場する「廬山寺本」関連の情報

にしたがい、最低でも「廬山寺本」が法然↓円道房↓高山寺↓顕光院↓清浄華院↓皇室↓廬山寺の順番で伝持されていたと述べた。第六節では修復の記録を伝える「廬山寺文書」「重要文化財修理報告書」「平成一四・一五年度 京都国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書」を中心に参照して「廬山寺本」が江戸時代と平成時代に二度大きく修復されていると言及した。そして、小結では折紙綴葉装の体裁をしたものに法然、および撰述に協力した者達が様々な方法で文字を筆録し、それと平行して文字を適宜修正していった末に「廬山寺本」が完成したと指摘した。また、「廬山寺本」は完成後にいろいろな人物によって、いろいろな場所で管理され、その中で訓点や丁付のような文字が書き足されたり、体裁が変更されたりして今まで来ていると結論づけた。

第二章では「廬山寺本」に遺されている推敲跡の実態を詳らかにした。第一節では第一章私積段における師資相承の問答の裏書を取り上げ、道綽善導流の教えは印度伝来であると主張し、且つ第一章段と第二章段以降の確かな連続性を形成するために師資相承の問答が追記されたと論じた。第二節では第三章私積段における本願成就の問答の削除に注目し、一々の願成就文を例示しながら経文の意義を強調するために問答が見せ消ちされたと考察した。第三節では第五章私積段末尾に確かめられる「有智賢哲思之応知」の見せ消ちに着目し、当初は論理的な確信を表現するとともに、読者の理解を促進する目的で「有智賢哲思之応知」の一文を使用したのが、後に人間観を優先するために「有智賢哲思之応知」の一文を消去したと明らかにした。第四節では第九章私積段における四修の説示に焦点をあて、それに推敲が施された背景には源信教学からの脱却、および善導教学の積極的受容があったと言及した。第五節では第十二章私積段において加えられた廃立の説示を取り上げ、善導教学への極力の準拠を試みると同時に廃立義の立場を推奨し、しかも論理的枠組みの正統性を主張するために廃立の説示が足されたと論じた。第六節では第十二章私積段で消去された『無量寿経』と『観無量寿経』の説示順序についての議論である「寿観二経説示前後論」を扱い、とりわけ「廬山寺本」の「寿観二経説示前後論」に認められる特有の説示へ注目し、その内容は阿弥陀仏の願数の相違を思慮していたからこそ示されたと考察した。第七節では第十五章段における『観念法門』の引文に着目し、最初は護念にまつわる新たな内容を展開したので「此是亦現生護念増上縁」という一文が書き記されたものの、最終的には一貫性を保持しつつ、増上縁の語義概念を明確化するために「此是亦現生護念増上縁」という一文が消去されたと明らかにした。第八節では第十六章私積段における選択我名の説示に焦点をあて、選択我名の位置づけに配慮して接続詞を変更し、続けて一度は章段の説示と選択義の整合性、あるいは道綽教学の影響を加味して文章の作成自体を取りやめたが、結局は選択義を敷衍するため再び文章の作成を実施したと言及した。そして、小結では第二章第一節から同第八節の検討結果と先行研究の成果を踏まえ、「廬山寺本」撰述時に法然が修学を経て理解した仏教に対する確信と未解決の問題に対する不安との間で葛藤を感じながらも、称名念仏による阿弥陀仏の極楽浄土への往生を説明するため、できる限り善導教学に立脚することが必要不可欠であり、更に本願に誓われている念仏の正体を一層詳らかにするべく、選択義を可能な範囲で委細に述べるのが最適であるという思想を有していたと指摘し、それが特に法然自身の善導教学への理解を深化させていった結果、「廬山寺本」に推敲が施され、現にその推敲の痕跡が「廬山寺本」に遺されていると結論づけた。

第三章では「廬山寺本」と他本の位置づけを詳らかにした。第一節では「廬山寺本」と他本の対校結果を提示しつつ「廬山寺本」の特徴を浮き彫りにし、それと他本の状況を照らし合わせることで「廬山寺本」と良忠が「広本」などと呼称した本、義山が「稿本」と表現した本、大谷大学所蔵の「禿庵文庫本」、大東急記念文庫所蔵の「大東急記念文庫本」が密接な関わりを持っている様子について確認した。第二節では「広本」に焦点をあて、「広本」の内容や龍谷大学所蔵の「存覚相伝本」の性格を整理した上で、「寿観二経説示前後論」における字句の差異から「廬山寺本」と「広本」は初稿本と中書本の関係にあると考察した。更に、「広本」から「存覚相伝本」が生じたと論じた。第三節では「稿本」に注目し、義山が開版した「義山版」跋文の解釈を検討しつつ、義山が「廬山寺本」を閲覧していた状況を示唆する資料に関して挙げ、「廬山寺本」と「稿本」は同一であると明らかにした。第四節では「禿庵文庫本」を取り上げ、「禿庵文庫本」が「廬山寺本」の特徴を継承すると同時に「廬山寺本」における文章訂正の指示をほぼ全て反映しており、しかも「廬山寺本」に見られる長文の欠文を補完している。「廬山寺本」と「禿庵文庫本」は定稿本と清書本の間柄にあると言及した。加えて、「禿庵文庫本」の対校本は「広本」系統の本であって、「廬山寺本」から「広本」、続いて「広本」から他本へ展開していった流れと「廬山寺本」から「禿庵文庫本」へ展開していった流れが別々に存在していたと示した。第五節では「大東急記念文庫本」に着目し、「大東急記念文庫本」の正体が建暦年間（一一二一・三〇一二・三・一二）に開版された「建暦版」である事実に触れながら、「大東急記念文庫本」が「広本」系統の本であると理解できるため、「廬山寺本」と「大東急記念文庫本」、言い換えれば「建暦版」は原本と刊本という間接的な関わりが認められると述べた。そして、小結では「廬山寺本」から派生した本が「広本」や「禿庵文庫本」であるのは間違いのないもの、それぞれが異なる状態の「廬山寺本」を起点としており、その上「広本」からも二つの系統に分かれる幾つかの本が派生して、且つ第三章でとりわけ俎上にあがらなかった「往生院本」「延応版」「義山版」などの本は、少なくとも「広本」「禿庵文庫本」「大東急記念文庫本」（「建暦版」）より内容的に「廬山寺本」から遠い存在であると結論づけた。

総結は本論で詳らかにした事柄を踏まえ、『選択集』の展開過程をめぐって私見を示した。

『選択集』の撰述は、九条兼実から法然へ要請があり、法然が九条兼実の要請に応じる形で開始されたと認められる。

そして、撰述が本格的な段階へ入った際には、法然が遵西、感西、証空の協力を得たと判断して間違いなく、撰述の現場においては、東大寺における「浄土三部経」の講説、および中原師秀のために開筵した逆修法会等々で参照したであろう手控えが使用されたと推定され、併せて口述筆記、並びに原典からの引用作業などが実施された結果、『選択集』は成立したと思われる。

また、『選択集』が一通り形になった後に行われたのが内容の更新であり、それを反映させた複製本の生成であったと考えられる。内容が断続的に変わっていった理由は、「廬山寺本」撰述時の法然の思想が主に法然自身の善導教学に対する解釈を漸次深めていったからである。複製本の書写にあたっては、まず推敲半ばの「廬山寺本」に則った「広本」を代表とするような種類の本が作られ、続いて推敲終了後の「廬山寺本」に則った「禿庵

文庫本」を代表とするような種類の本が作られたと理解される。

本稿で論及したように、『選択集』は複雑な展開過程をたどったと見られる。言ってみれば、『選択集』は成長する書物となったのである。